NieR:Hero's

たかすぎ

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
私は生きている
彼らを、彼を置きざりにしたまま
これは呪いか、それとも罰か
それでも私は生きなくてはならない
私の番が廻ってくるまで、、、

目次

0.5 48
0.4 36
0.3 27
0.2 18
0.1 10
0 1

0

全ての存在は滅びるように設計(デザイン)されている
生と死を繰り返す螺旋に、私たちは囚われ続けている
これは呪いか、それでも罰か

、、、いや、きっとこれは罰なのだろう
少なくともあの時から
神に弓を引いたあの時から

【報告：新鮮】
「、、、、、」

日本のどこかにある森林の川辺で、1人の少女が黙々と釣りをしていた。
空が晴々しく、少女は気持ちのいい風を一身に浴びながら寛いでいる様子だ。

【報告：新鮮】
「、、、、、、」

釣りをしていると言っても、その方法は通常のそれと違った。
随行支援ユニットという、白い箱のような機械を竿代わりに使っていた。

個体名はポッド０４２。件の少女をサポートをするのが任務であり、射撃にハッキングに探索に通話と、とても便利なロボットだ。
目下の彼の悩みは、主人である少女が自分のことをスマホ扱いすることだろうか。

【報告：ヒット】
「、、、、、、、」

釣りはポッドの数ある便利な機能の一つであり、少女は腕を組みながらタイミングを見計らって魚を釣っていた。先程釣った魚でちょうど１５０匹目を更新していたが、彼女が止める気配はない。
もちろん１５０匹も魚を食べる必要も食べるつもりも彼女にはない。自分の食料分を確保したあとは、釣った魚をひたすら川に返していた。
彼女は自分では説明がつかないほど、釣りという行為を気に入っていた。

【報告：新鮮】
「、、、、、、、、、、」

少女の名は２号機Ｂ型、通称２Ｂトゥービー。体の殆どが機械で出来ているアンドロイドだ。
その頭髪は雪のように白く、それと対象的に黒い布のような戦闘用ゴーグルを着けていた。その服装もまた黒く、ゴシック風のワンピースに手袋、タイツ、そしてヒール靴を身につけていた。
その姿はまるで深窓の令嬢のような神秘さと美しさを感じさせる。
とてもじゃないが、自然が溢れる場所を歩くには向いていない。

【報告：ヒット】
「、、、、、、、、、、、、」

２Ｂは主に戦闘を目的に作られた存在だ。
だがこの１０年、この名も知らない森で毎日を平穏に過ごしていた。
その１０年より前、彼女が何をしていたかは後々に語られるであろう。

【、、、報告：新鮮】
「、、、、、、、、、、、、、、」

流石に１５３匹目を釣ったところで、ポッド０４２が２Ｂに制止の声を掛けた。

【ポッド０４２から２Ｂへ質問：いつ釣りを止めるのか】
「、、、もうちょっと」
【報告･その返答は今ので３８回目だ。早急に釣りを止め、栄養を補給することを推奨】
「、、、もう正午か。確かにもうそろそろ止めた方がいいか」

フゥ、と息をつき、ポッドが生成したイスから立ち上がる。ポッドは便利なのである。
食用に取った魚を持ちながら、自分が長年の拠点としている廃墟に向かった。
その建物がどういった経緯で人々に忘れ去られたか不明だが、捨てられていた割には構造がまだしっかりしており、気温差や気候の差が激しい日本では快適な屋敷だった。
今日は何の料理を作ろうか。
焼き魚は飽きたし、燻製にしようかな。
ポッドでいい感じに炙れば出来そうだし。
ポッドは便利なのである。
匂いが屋敷につくかな。
いや、ポッドに消臭機能あったし別に大丈夫か。

ポッドは便利なのである。
多少汚れてもポッドで綺麗にできるし、この際色々挑戦してみるか。
ポッドは便利ｎ、、

「ん？」

そうして魚をどう調理するか考えながら屋敷に向かう途中、まるで山のように大きい男にいた。
首にラジオをぶら下げていて、そこから流れる音声を聴きながら歩いているようだ。
２Ｂは咄嗟に木の裏に隠れた。一目でわかる。
やつと関わってはいけない、、！
だが、それは既に２Ｂに気付いていた
そして２Ｂがそのことに気付いた瞬間、それは攻撃態勢に入っていた。

「ヴォオオオオオオオオオ!!!!!」
「っ!!」

鼓膜が破れそうなほどの叫び声が響き、山のような男は２Ｂがいる方向に地面を殴った。
ゴシャッ！という音と共に地面は抉れ、石や砂利が勢いよく２Ｂに襲いかかる。
２Ｂは砂の激流を咄嗟に横に避けた。しかし１歩遅く、素早く接近してきた大男の巨大な手に胴体が捕まった。
このままじゃ握り潰される　。

「ポッド!!」

ポッド０４２は箱のような胴体を開き、レーザーを発射した。極光

が大男の腕に当たり、その掌が開かれ、そこから脱出する。

「、、、何故私を攻撃する？」

距離を取りながら、２Ｂは岩山のような男に聞いた。大男はこちらを見ずにブツブツと不気味に呟いていた

「姿を確認された、、すぐに始末せねば。

主に怒られてしまう、、すぐに殺さなければ」

どうやらこちらを見逃す気はないらしい。

それならそれで、こちらにもやりようがある！

「私は２Ｂ。あなたの名前は？」

久しぶりに人？にあったせいか、場違いな事を聞いてしまった。馬鹿か私は。

「、、、ギガントマキア」

驚いた。まさか答えが帰ってくるとは。

もう一度質問してみよう。

「なぜ私を襲う？私は別にあなたに危害を加えるつもりはない」

ギガントマキアはこちらの目を見ながら答えた。

「、、、姿を見られた。潜伏せよと主から命令されている。、、目撃者は消す」

「、、そう」

フゥと息を吐き、ギガントマキアを見つめる。

「残念だけど、そんなことで私は死ぬ訳にはいかない」

少女の背中に光が集まり、２本の剣が現れた。

まるで少女の髪を連想させるように白く、美しい

打刀『白の契約』。太刀『白の約定』。それがその２本の刀たちの名であり、２Ｂの愛用の武器だった。

２Ｂの右後ろで浮遊しながら待機していたポッド０４２も銃口を開き、目標の山男に狙いを定めた。

一瞬間が空き、２人は飛び出した。

「ヴォォォァァァァ!!!!!」

ギガントマキアが叫びながら腕を振り下ろす。

地面を滑るように移動し、それを回避。すれちがいざまに、白の契約で胴体に切りつける。

傷を負わせたが、浅い。身体増強の〃個性〃か。

〃個性〃、それは人が火を吹き、空を舞い、車を片手で持ち上げることのできる超常能力だ。人によって備わる力は違い、世界総人口の８割が〃個性〃を発現させている。

もちろん、そんな〃個性〃を悪用して犯罪を犯す者、敵（ヴィラン）も当然現れる。

それを取り締まるために、コミックのような職種、ヒーローが誕生したのだ

世は絶好のヒーロームーブ。数いるヒーローたちによって、敵（ヴィラン）たちは厳しく取り締まわれている。

ブォン！

と風を切り裂く巨大な足が通り過ぎる。２Ｂは膝を曲げ、体を回転させながら避け、その勢いのまま白の約定を投げる。

白の約定は、２Ｂが持つ装備の中でも重い部類の刀だ。そんな重量物が迫るが、ギガントマキアはデコピンのように指を弾き、その衝撃波で弾かれた。なんて出鱈目な力だ。

真上に飛んで衝撃波を避け、白の契約で切りかかるが、巨大な左腕が勢いよく迫る。

その質量から繰り出される威力は、まるでダンプカーの突撃だ。当たったらひとたまりもないだろう。

「ポッド!!目線目標でボムを発射!!」

２Ｂは白の契約で攻撃を受け流しながら叫ぶ。ボムとはポッドに搭載されているプログラムの一つだ。２０個の爆発玉を広範囲に発射し、周囲のモノを破壊する。

ボムはギガントマキアの顔に着弾した。その威力に思わず仰け反る。

２Ｂはその隙を逃さない。光と共に新たに呼び戻した白の約定を振り下ろす。ギガントマキアはその特異な身体能力で感じとったのか、後ろに逃げようとする、が体勢がよろけた状態では意味がなかった。

一切り目はギリギリ避ける。太刀はその勢いを殺さずに地面に叩きつけられ、石や砂利と共に火花が散る。

２Ｂはその勢いのまま体を前身させ、刀が接触している地面を起点に一回転しながら、また白の約定を振り下ろす。

今度は避けきれず、赤い鮮血が舞うように宙を飛ぶ。だが、まだ浅い。二撃目がまた地面に叩きつけられた瞬間、ギガントマキアは右腕で殴り掛かる。

殺った!と、ギガントマキアは本能で感じとった。太刀である白の約定は重い。少なくとも目の前の少女は、簡単に投擲したり地面に叩きつけたりと、その重さを扱いきれてない。

少女の〃個性〃は不明だが、武器を何もない空間から取り出していたところを見るに物質転移と推測される。

戦闘技術と後ろの箱のような機械は厄介だったが、どれも自分の命には届かない。

「終わりだ!!!」

無慈悲な一撃が少女に迫った。敗因は明らかだ。それは相手が思わぬ強敵で、決着を急いだこと。そして、２Ｂのような未知の戦闘用アンドロイドと今まで戦ったことがなかったからだ。

２Ｂは白の約定を振り下ろした勢いのまま武器を手放し、ギガントマキアの懐へ前身する。そのまま体を倒し、地面に手を着いた。そこからまるでバネのように肘を使い、そのまま流星のようなダイビングキックをギガントマキアの鳩尾に炸裂させた。

２Ｂは体の殆どが機械のため、その重さは成人男性の平均体勢の２倍だ。そして何より、２Ｂはヒールを履いていた。

２Ｂの両足はギガントマキアの体に深く突き刺さり、そして蹴られた空き缶のように吹き飛んだ。ギガントマキアは何回か地面にバウンドしたあと、白目を向きながら気絶していた。

「ハァ、ハァ」

２Ｂは膝に手を着いて息を切らした。それは疲れか、久しぶりの戦いによる緊張したからか。

今まで戦ってきた中で１番の強敵だった。上手く不意をつけたが、次は勝てるかわからない。トドメを刺さなければ。

２Ｂは白の契約を呼び出し、ギガントマキアに歩いて近づく。

刀を逆に持ち、確実に仕留められるように頭に狙いを定め、そこで躊躇した。

襲いかかってきたとはいえ、これは人間だ。私は私が生きるため、人間を殺してもいいのだろうか。

「っ!!」

２Ｂたちアンドロイドは人間のために作られ、そして２Ｂはそのことに誇りを持っていた。この１０年、俗世と関わりを絶っていたとはいえ、それは変わらない。

しかしここで仕留めなければ、また奴は自分の命を狙うだろう。次はきっと勝てない。確実に殺される。

迷いで刃が揺れる。これ程の身体能力だ、目覚めるのにそう時間はいらないだろう。

殺すか、殺されるか。少し葛藤し、２Ｂは友人の言葉を思い出した。

『２Ｂは、、２Ｂの選んだ人生を生きてね、、！』

「９Ｓ（ナインズ）、、」

そして、、

２Ｂは刀を納めた。どうせ終わりのみえない人生だ。それなら言葉通り、自分の選ぶ人生を生きよう。

涼しい風が通り抜ける。穏やかで心地のいい午後の話だ。

0．1

【報告・スキャンしたところ、対象は21分16秒後に目覚める模様。不殺を選択するならば、早急な移動を推奨する】
「、、私はまだ何も言ってないけど？」
【当機が2Bのサポートを開始してから15年と7ヶ月、28日と1時間38秒が経過した。ここぞという時の2Bの選択は弁えている。】
「うるさい」

2Bは不貞腐れたように、少し気恥しそうに言った。初めて2Bの元に配属された時は作業的且つ機械的だったのに、随分と気遣いを覚えるようになった。ムカつく。
ハァっと息を着いたあと、これからのことを考えを巡らせる。ギガントマキアは恐らく次も追って来るだろう。今度はこちらが殺されるかもしれない。だが不思議と気分は明るかった。精一杯、自分の選んだ人生を生きるんだ。悔いはない。
白く綺麗な髪が午後の風でなびいた。とりあえず風の向くまま、自由に走るか。

【ポッド042から2Bへ提案】

出鼻をくじかれた。ムカつく。

「、、なに？」
【当機は何らかの対策を練るために対象：ギガントマキアの言動を分析した。その結果、対象もあまり人目につきたくないという結論に至った。】
「確かに。ヒーローをやれそうな凄い個性を持っているのにこんな山奥にいるし、何より目撃者は消すと言っていた。明らかに隠れている」
【同意。そしてその結論から、１つの打開策を導いた】
「と言うと？」
【人目のつく場所に２Ｂが行けば、追跡を免れる】
「なるほど、木を隠すなら森の中か。
ポッド、ここから私が出せる最高速度でたどり着ける人里はある？」
【周囲の地形を検索、、検索完了。３件の街がヒット】
「その街で最もヒーローが多いのは？」
【ここから北西７８ｋｍにある○○市がそれにあたる模様。２Ｂの速度なら、おおよそ１０分でたどり着ける】
「了解。さぁ、久しぶりに走るか」

屈伸しながら走る準備をする。最近ポッドが生意気だから、８分以内に着いてやる。

【ポッド０４２から２Ｂに質問】
「なに？」
【大丈夫か？】

驚愕で目を丸くした。質問の内容より、ポッド０４２がこういう質問をしたことに驚いた。この箱最近、自我が芽生えすぎじゃないか？
でも、、その心遣いは、なんだかとても嬉しかった。思わず笑みを

浮かべる。

「大丈夫。今まで人目を避けるために森で暮らしてたけど、いつまでもそんな生活を続けるわけにもいかないし、いい機会だ。」
【それなら、いい】
「それにいい加減、釣りの竿代わりをするのも飽きたでしょ？」
【それにはとても同意する】
「こいつ」

笑いながらポッドを撫でる。ポッド０４２は撫でられると機嫌が良くなる。触覚でも搭載しているのだろうか？不思議だ。

「ポッド０４２」
【どうした？】
「ありがとうね」

独りぼっちで生きると思っていたけど、私は１人じゃなかった。

「おもしろい」

明かりの着いていない暗い部屋で、1人の男がモニターの中の映像を観ていた。

沢山の管に繋がれ、口から上の顔がのっぺらぼうのように潰れていた。他者から見れば、何故生きているのかわからないほどの重傷だ。

「実におもしろいよ、ドクター」
「何が面白いんじゃ、先生？」
「何って、この映像だよ。観てくれよ。ギガントマキアが倒された」
「なんと?!あのギガントマキアがか?!!」
「ああ」
「信じられん。奴は改造無しで複数の⁚個性⁚の所持に耐えられた、うちの最高戦力の一つじゃぞ」
「大丈夫だ。彼女はトドメをさしていないし、傷自体も呼び戻せばすぐに治る」

その言葉に、ドクターと呼ばれた男は更に驚く。

「彼女？マキアを倒したのは少女なのか??」
「ただの少女じゃない。ニーア・フローレス博士の最高傑作の一つだ」
「なに?!あの10年前に死んだ裏切り者のか?!!」
「ああ。あの時、博士の成果の全てが燃え尽きたと思ったが、まだ日本にその幾つかが残ってそうだな」

口元しかないその顔で邪悪に笑いながら、モニターの中の白と黒に包まれた少女を見る。

「ヨルハ計画の産物がこれからどうなっていくか、とても楽しみだ

よ、！」

「ポッド！タイムは?!」
【１０分３秒。以前より速度が落ちた。】

８分どころか１０分も切れなかった。悔しい。

【原因は日常生活用にプログラムを組んでいた事と推測。推奨：緊急時に備えて戦闘用、逃走用のプログラムの構築】
「、、うるさい」

街に着いた２Ｂとポッド０４２。２人はそこでまず、服とバックを買おうとしていた。
理由は単純で、今の格好だと目立つからだ。２Ｂは１０人中１０人が美少女と答えるほど顔が整っているが、戦闘用ゴーグルとゴシック風ワンピース、そしてポッド０４２が何よりも目立つからだ。

「服はポッドが綺麗にしてくれていたからいいけど、流石に目立つしね」

ポッドは便利なのである

【同意。その上、当機のような随行支援ユニットは日常生活の中では見かけない。早急な対応を推奨】

「、、、スマホってことで通らないかな？」

【その言い訳は拒否する】

ポッド０４２は即答した。目に準ずる機構は無いはずなのだが、じっとした視線を感じる。余程嫌なのだろうか。

【ポッド０４２から２Ｂに質問】

「なに？」

【現在の目標は目立たない服と、当機が入れるサイズのバックの購入。購入のための手段について、何か考えはあるのか？】

「考えって、普通にそこらの店で購入を、、、あ」

２Ｂは気付いた。自分が１文無しなことに。そして呆れたような目線をポッドから感じることに。

どうしよう。盗むか？いや、ヒーローに見つかってしまったら本末転倒だ。

街から外れたら狙われる可能性があるので、なるべくこの街からバスか電車で、より遠い場所に移動したい。うーむ。

【ポッド０４２から２Ｂに提案】

「なに？」

【廃ビルなどの使用されていない建物に身を隠し、夜になってから行動してはどうか？】
「、、お前は本当に頭がいいな」
【報告：ｉ０年間の森林生活によって、思考力や戦闘力が落ちている模様。早急な力の取り戻しを推奨】
「壊すよ」

生意気な箱の言う通りに、使われていないビルで夜まで過ごすことにするか。

時は過ぎ去り、住民が寝静まった夜、２Ｂは行動を開始した。
人工物のない森林と違い、夜の街は明るい。星が少ししか見えないのが残念だが、未知の世界を歩くことは、まるで冒険のようにワクワクする。
まるで悪いことをしてるみたいだ。
人気のない道を歩く。ポッドにマップをディスプレイで表示させ、これからのことを考えながら。
やはりお金を稼ぐ手段が必要だ。移動は徒歩でもいいが、少なくとも３日に１回は栄養補給の必要がある。それにどうせなら見たことがないものを見に行ったり、美味しい物を食べることを目的に行動したい。
２Ｂはこの１０年間を森で過ごしたが、ポッドによって外からの情報は得ていた。主にテレビジョン機能で。
ポッドは便利なのｄ、、。

自分には縁がないものと考えていたが、こうして人里に降りる機会ができたのだ。いろいろ試したい。

自分の人生を、生きたい。

綺麗な川に架かる大きな橋を歩き、ポッド０４２に金を稼ぐ手段を聞こうとしたところで、橋の向こうにいる男が、こちらを驚いた様子で見ていることに気付いた。
まるで骸骨のようにガリガリだが、目の奥の輝きが只者ではないと感じさせる
今日はよく変な男に見られるなと、２Ｂは呑気に考えていた。
夜風で川辺に生えている桜の木が揺れる。もうすぐ開花し、見事な花て人々を魅せるだろう。

「お前は、、ヨルハ計画によって生み出されたアンドロイドか？」

その瞬間、警戒レベルを最大まであげる。ヨルハ計画を知っているということだけで、この男の素性は推測できた。

「何故日本（ここ）にいる？ヨルハ計画のアンドロイドは一体残らず破壊されたはずだ！」

即ち、ＦＢＩか、ヒーロー。

「もし貴様たちがまた人々を害するというのなら！」

突然、男の体が盛り上がり、筋骨隆々の大男になった。金髪の髪に力が入り、前髪が触覚のように２本反り立ち、特徴的な髪型に変わる。

「私はそれを全力で止める!!!」

そのヒーローの名はオールマイト。
日本でＮｏ．１の実力を持つ、平和の象徴だ。

0．2

「Ｈｅｙ。君、なぜ私を攻撃をしないんだ」
「、、、あなたこそ、なぜ私を殺そうとしない」

月が綺麗な真夜中、２人は対峙していた。場所は先程までの住宅地から移動し、人が全くいない広大な空き地にいた。後から聞いた情報によると、来週から高級住宅地として建設される予定の土地だったらしい。
だからこそ、まるで小さな隕石が落ちたようなクレーターが幾つもできるような戦闘でも、被害が出ずに済んだのだろう。

時は少し遡る。
橋で対面してしまった時、２Ｂは即座に逃げることを考えた。このヒーローの活躍は動画で観ている。今ここで戦えば、街中に被害が出ることは確実だ。
だが、そんなことはＮｏ．１ヒーローも当然考えていた。撹乱しようとポッドに指示を出す瞬間、顔を捕まれ、ロケットのように空を翔け、ここまで連れてこられたのだ。
流石全てのヒーローのトップに立つ男。パワーもスピードも桁違いだ。少し隙をみせただけでこのザマだ。

「ポッド!!」

２Ｂは地面に着地した途端、ポッドに指示を出し、オールマイトにポッドの特殊兵器グラビティを発射した。オールマイトは咄嗟に避けたが、特殊な重力の球体が地面に着弾した瞬間、そこから発生した

半透明のドームに引き込まれる。
２Ｂはその隙に顔に掴んだ手を解き、更にボムを地面に発射し、衝撃と土煙でオールマイトの目を眩ませる。

「目くらましか！」

オールマイトは強引に重力のドームから逃れ、その右腕を振るう。その威力に、土煙はたちまち吹き飛んだ。
どこに潜んだ？どこから攻撃してくる？
オールマイトは瞬時に思考する。だが、少女型のアンドロイドはすぐに見つかった。
２Ｂは走っていた。回れ右をして、こちらに完全に背中を向け。
Ｎｏ．１ヒーローは思わずポカンとしたが、その間にも２Ｂは恐ろしいスピードで走る。というかもう空き地を抜け出し、森に入ろうとしていた。

「ちょちょちょちょ!?待ちなさーい!!?」
「くっ!!」

オールマイトは思わず全力を出して２Ｂに追いついた。そのせいで大きなクレーターが一つ増えた。地面は２Ｂのボムとオールマイトの全力の蹴り出しによってボコボコだ。いや、殆どオールマイトによる被害だ。きっとそうに違いない。
追いつかれ、その上回り込まれた２Ｂは止らざるおえない。
そうして状況は現在に戻る。

５ｍもない距離で睨み合いながら、２人は思考を巡らせる。２Ｂはこの場の逃走方法を、オールマイトは目の前の少女のことを。
オールマイトは少女のことを知っている。正確には、２Ｂが所属していたヨルハ部隊とヨルハ計画、そしてそれらがアメリカで起こしたヨルハ事件について知っている。もっと正確に言うと、オールマイトはその事件の当事者だった。
アメリカ留学時代に知り合ったＦＢＩから協力要請を受け、そのアンドロイドの部隊を鎮圧するヒーローチームのメンバーとして参加したのだ。
当時はそれなりに場数を踏み、オールマイトはヒーローとしての貫禄を感じていた。日本の誇る平和の象徴としての実感を。
だがその事件の顛末は、彼がヒーローになって最もやるせないものとなった。とても酷く、惨たらしかった。

とにかく、そのような経緯から２Ｂに対して過激な対応をした。
だが、この白い髪の少女はこちらを一切攻撃しなかった。重力のドームも爆弾も威力が弱く、こちらに危害を加えるものではなかった。
少女は、ひたすら逃亡を図っていた。

もしかしたら話し合えるかもしれない。
ヒーローとして、そんな考えがオールマイトに浮かんだ。

「Ｈｅｙ、少女。私の名前はオールマイト。ヒーローをしている。少女の名前は？」
「？、、、２Ｂ（トゥービー）」
「２Ｂ（トゥービー）、君は人を傷つけようと思っているかい？」
「、、思わない」
「そうか。それじゃあ次の質問だ。君の目的はなんだい？」
「、、自分の人生を生きること」

「フッ、そうか」

オールマイトは少女の純粋な願いに思わず笑いながら、警戒を解く。

２Ｂは突然の笑いに疑念を抱き、眉を上げる。

「２Ｂ、いきなり攻撃をしてすまなかった。私は君たちのことを知っていたから、ついつい過敏になってしまった」

「、、そう。こちらにこれ以上危害を加えないならいい」

そうして、やっと２Ｂも警戒を解く。わずか数分の出来事だが、かつてないほど濃密な数分間だった。

それとオールマイトに同時に聞きたいことができた。

「もしかしてオールマイトはヨルハ部隊の鎮圧に参加していた？」

「ああ、アメリカのＦＢＩに知り合いがいてね」

「、、アンドロイドたちに生き残りはいた？」

「、、すまない。事前に部隊から離反した者を除いて全員、、、」

「、、、そう。何人かは生き残ったのね。」

顔を上げ、空を見上げる。綺麗な空が見えた。その光は、とても美しい。

２Ｂを覗いて、アンドロイドたちは全員死んだと思っていた。２Ｂがその引き金を引いたと。

だから、何人かが生き残ってくれて良かった。心の底から嬉しく思う。

「２Ｂ、君は何故日本にいるんだい？生き残ったアンドロイドたちはアメリカ政府に保護されているはずだが」
「私も当時はアメリカにいた。本当だったら私も死んでいたんだけど、９Ｓ（ナインズ）、友人が日本にあった予備の義体に私をインストールしてこうなった」

義体とは、２Ｂたちアンドロイドのボディの基となる体だ。例え体が大破しても、その機体のデータが残っていれば、義体にインストールすることで復活することができる。

「日本に義体が？」
「そう。私たちを作ったフローレス博士は、元々日本でアンドロイドを研究していたみたい。調べてみたけど予備の施設を幾つか作ったと、私が目覚めた場所にデータが残っていた」
「そうか、フーム。博士はアメリカに拠点を置いていたから、それは盲点だったな」
「多分大丈夫。場所はデータになかったけど、私が起動した時点で大分基地は傷んでたし、電力も殆どなかった。１０年も立ってるし他の拠点も、電力が切れて使い物にならないと思う」
「ふむふむ、そうかそうか。ん？２Ｂはこの１０年間、その基地にいたのかい？」
「いや、凄く古いしダサかったから起動してすぐに壊した」
「壊した?!ダサいという理由で?!!」
「うん。その後は使われてない屋敷と森で１０年過ごしてたけど、いい加減外に出ようと思って」

２Ｂはギガントマキアのことは言わなかった。理由は単純で、彼女は自分を殺しかけた敵（ヴィラン）のことをすっかりド忘れしていた。喋らずに２Ｂの右後ろで浮遊していたポッド０４２から、呆れたような視線を感じる。何故だ。

それはそうと、オールマイトは２Ｂの奇行にすっかり笑ってしまっていた。

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ！２Ｂ少女、君はアンドロイドとしては変わってるねぇ!!」

「そうかな？」

【ポッド０４２から２Ｂへ・本日遭遇した対象、ギガントマキアについては報告しないのか】

「あ、そうか。オールマイト、そもそも私が森から出てきたのは、山のように大きくて強い敵（ヴィラン）に狙われたからなんだ」

「なに!?２Ｂ少女から見ても、その敵（ヴィラン）は強かったのかい？」

「うん、とても強かった。スピードはともかく、パワーはオールマイトに近いかも」

「そんな敵（ヴィラン）が?!」

パワーがオールマイトに近い敵（ヴィラン）。それは一般市民にとってはとても危険な存在だ。オールマイトのパワーは類を見ない威力を誇り、身体強化系の個性のヒーローは沢山いるが、オールマイトを超える者は１人としていない。

その威力は、拳を振り上げるだけで天候を帰ることが出来るほどだ。

「昼間に遭遇したし、もうどこか遠くに逃げてると思う」

「そうか、、、。これは近いうちに塚内君に相談しないとな。ああ！そ

うそう、２Ｂ少女。君はこれからどこに行く予定だったかな？」
「特に予定は無いけど、強いて言うならお金を稼ぐ手段を探しつつ、夜の間に遠くに行こうかなって。この服とポッドが目立つし」
「そうかそうか。ふむふむ、、よし。２Ｂ（トゥービー）少女!!」
「？はい」

「君、ヒーローにならないかい？」

「、、、、はい？」

突飛な質問に困惑する。正確無比なポッド０４２も、思わずその思考回路をストップさせてしまった。
私がヒーロー？アンドロイドの私が？ヒーロー？
オールマイトは、まるで名案だと言わんばかりの満面の笑みだった。どうやら冗談ではないらしい。

「、、なんでヒーロー？なんで私を？」
「いやね、君お金に困ってるだろう？それなら君のその力を活かせばいいんじゃないかと思ってね！」
「、、私はヒーローになんてなれないよ。その資格がない」
「そんなことはない。現にアメリカで、ヨルハ部隊の一員だったアンドロイドがヒーローをやってるぞ！」
「え?!」

衝撃的なことを聞いた。日本のテレビしか観てなかったから気づかなかった。え？ヨルハの兵士がヒーロー??

「その少女本人の希望でね、人の役に立てることがしたいって。当時私もそれに協力してね。一時期私のサイドキックとして手助けをしたよ」

「、、その子はヒーローになれたんだ」

「ああ、8年前から自立して、もう立派なヒーローだ！確かアメリカのヒーロービルボードチャートでも上位のランキングだぞ！」

「、、ハハ」

さっきから驚きの連続だ。人と関わる資格がないと森に引きこもっていた2Bと比較するように、人を守り、助け、認められているアンドロイドがいた。

正直、、、。

「羨ましいかい？」

「！」

「あの少女は言っていたよ。アンドロイドは人の役に立つために生まれた。罪を償う意味でも私はヒーローになるって」

「、、、、、」

「私は確信しているよ。君は彼女と同じだ。強く、優しい。何より君のその力は人を守れる！」

「、、でも方法が解らないし、お金もない」

【報告・ヒーロー免許の為の仮免試験に合格した後、本免許を取得することでヒーローと名乗ることが可能】

「こ、コラ！」

「おいおい、ポッド君もこう言ってるんだぜ？それにお金その他諸々の支援ぐらい私がするさ！」
「どうしてそんなに、、？」
「何故って？ヒーローだからさ！ヒーローってのは余計なお節介を焼くものだぜ？」

ああ、この人はすごい。私たちアンドロイドがどういう存在か理解しているはずなのに、それでもこんなことを言ってくれる。
実力だけじゃない。この心の強さがこの人を平和の象徴たらしめるんだ。
オールマイトは２Ｂに手を差し伸べた。

「さぁ、２Ｂ（トゥービー）少女！ヒーローになろうぜ!!」

０．３

突然だが、質問させてほしい。１０年間、飲み食いできる物が水や魚や果物だけだとして、その後久しぶりにコーラとハンバーガーを食べたらどういう反応をするか。

２Ｂの場合はこうなった。

「オールマイト、私絶対ヒーローになる」

「ハンバーガーを食べただけでそんな決意抱かれても困るぜ?!」

あれから場所は変わり、２Ｂとオールマイトはあの有名なハンバーガーチェーン店に来ていた。美しい朝日は顔を出し、徹夜の目に染みる。

美味い。１０年前も美味しいということは理解していたが、毎日魚や山菜ばかりを食べていると最早三ツ星ミシュランの料理のように感じる。もうお魚は飽きた。

「バーガーうま。コーラうま。」

「ＨＡＨＡ、それでそんなに喜んでも困るぜ?世界にはもっといろんな料理があるんだから!!」

珈琲を飲みながら、オールマイトは話しかける。
今は初めて会った時と同じガリガリの姿だ。本人曰くこの姿がトゥルーフォームで、オールマイト自身の個性の影響でそうなっているのだとか。
ギャップがありすぎて同一人物だと思えない。

「そういえばヒーローになるって言ったけど、具体的に私は何をすればいい？」
「そうだな、まずは学校だな！」
「学校？」
「実は私、今年の４月からトップヒーローを数多く排出している学校、雄英高校で教師をすることになってね。ここの土地にいるのも、しばらく事務所を閉めるからその手続きをしに来たんだ！」
「じゃあ今年は勉強に専念して、来年から入学って感じかな」
「いや、校長に事情を話して今年から特別入学にしてもらおうと思ってる。アメリカじゃあヨルハ部隊の一員は保護対象だけど、日本は君のことはあまり詳しく知られてないからね。もしものことをかんがえてさ！」
「、、裏口入学？」
「んゞ ー!?聞こえが悪いな?!」
【ポッド０４２から２Ｂに報告：２Ｂは戸籍を所持していない】
「あ、それもなんとかしなくちゃな！」

実はオールマイトには２Ｂの入学を急ぐ理由がもう一つあったが、それを知るのはかなりの先のことであった。
改めて、これからの事を考えれば問題はまだまだあるが、２Ｂは少しワクワクしていた。森林での生活も穏やかで良かったが、自分の知

らない世界に行くのも冒険心が湧く。
今度はどんなモノに会えるのだろうか。

「ああ、そうそう。２Ｂ少女」
「何？オールマイト」
「こちらから誘って言うのもなんだが、ヒーローってのは危険な職業だ。命懸けで綺麗事を実践するお仕事だからね。常に予測不能な事態に遭遇する。命を落とすかもしれない。それでもやるかい？」
「やる。もう決めた。私はヒーローになることを選ぶ」
「、、フフ、即答か！よーし、それじゃあ最後に一つだけ!!」

オールマイトは２Ｂに向き合い、黒い目隠しに隠された目を見ながら言った。

「君がこれからどんな困難に会っても、この言葉を思い出して頑張って欲しい！」

「Ｐｌｕｓ（プルス） ｕｌｔｒａ（ウルトラ）!!『更に向こうへ』ってね!!!」

「ポッド、写真を撮って」
【了解】

新たな出会いが溢れる４月、２Ｂは桜道を歩いていた。その花弁を散らせるのは一瞬だが、その短い一時が桜をより美しいと感じさせる。日本に来て良かったことの１つだ。
あの後、２Ｂは無事入学することができた。その服装は黒で統一されたものではなく、雄英高校の制服を身につけている。あの布のようなゴーグルも着けていない。
戸籍は無事入手することができた。これについてはオールマイトに多大な苦労を掛け、感謝してもしきれない。

【心拍数が上昇気味：なにか気にかかることがあるのか？】
「ちょっと緊張してるかも。９Ｓとかヨルハ部隊の皆とは話してたけど、それ以外の人と関わるのってオールマイトが初めてだったし」

見事な桜の写真を撮りつつ、２Ｂは答えた。
ちなみにギガントマキアは別だ。ああいう殺し合いを関わりと呼びたくない。

「それに学校っていうものに自分が通うなんて思ってなかったから」
【同意：当機も同行することを想定していなかった。よって学校生活における２Ｂのサポートは保証できない】
「いいよ。そのために勉強したし」

この日を迎えるまでの２週間、彼女は学校について学習した。ネットを検索したり、実物の建物をいくつか見回ったり。
時にはオールマイトに訪ねたりもした。彼曰く学校は青春を謳歌するものだという。
青春についてもっと質問したら、オールマイトは『となりの○物くん』という、大昔に連載された少女漫画を読めと言われた。そこに青春が何たるかが詰まっていると。
その内容は大変興味深いものだった。

「ハルと雫はともかく、まさかササヤンと夏目がくっつくとは思わなかった。青春というのは奥が深い」
【同意・青春というものの更なる理解を得るため、新しい書籍を探すことを推奨】

意外とこういう娯楽に弱い２Ｂは、少女漫画にどハマりしていた。

彼ら彼女らが精一杯学校を楽しむ姿に胸を高鳴らせ、ページをめくる手が止まらない

もっと別の話を読みたい。またオールマイトに似たような漫画がないか聞こう。

しかしなぜ彼はこういう物を知っていたのだろうか。意外とそういうのが趣味なのだろうか。

まぁいいか。

【報告：そろそろ目的地に到着】

「了解。あ、ポッド」

【どうした】

「あなたを連れてる言い訳として、今から会う人たちにはポッドのことをスマホとして紹介するから」

【、、、】

今まで体験したことのない新しい生活が始まる。

場所は移り、ここは雄英ヒーロー科の1―Aの教室。同じ中学出身の芦戸三奈と切島鋭児郎は、これから1年間を共に過ごすクラスメイトについて話していた。

「ねーねー！切島ー！」

「んぁ？どうした芦戸？」
「知ってるー？毎年ヒーロー科ってＡ組とＢ組で２０人ずつらしいんだけど、今年のＡ組は２１人いるらしいよ?!」
「え?!マジで?!」
「ほら！その証拠に席が２１個もあるよ！」
「あ、ホントだ。なんでだろ？」
「去年の１年生の先輩が留年したとか？」
「私もその話、聞いたわ」

そこで切島の隣の生徒が会話に入り込む。彼女の名前は蛙吹梅雨。個性は異形型の：蛙（カエル）：で、蛙っぽいことはなんでもできる。
異形型とは個性が目に見てる形となって発現するタイプの個性である。つまり耳や足などの体の一部が動物の形だったり、顔や体格が全て違う動物の姿だったりする。
蛙吹は人間よりの姿をしており、蛙の部分が上手く組み合わさって非常に可愛らしい。
ちなみに芦戸の個性は：酸：。酸性の液体を生成できるが、その影響なのか肌は紫色、白目は黒色で頭に２本の角が生えており、半分異形型と言える。

「私、蛙吹梅雨っていうの。梅雨ちゃんと呼んで」
「あたしはねー、芦戸三奈！三奈でいいよ！よろしく、梅雨ちゃん！」
「俺は切島鋭児郎！芦戸と同中だ！よろしくな、梅雨ちゃん！」
「よろしく、切島ちゃん、三奈ちゃん」

軽く自己紹介をした後、先程の話題をまた話し始める。

「私、上級生に同じ中学の先輩がいるのだけど、去年は誰も留年してないらしいわよ」
「え、本当？」
「じゃあ今年が特別なのか」
「どうやらそうらしいわ。雄英って自由な校風の通り、なんでも規格外だって先輩に聞いたわ」

そう、雄英高校は‥自由‥な校風が売り文句。それは生徒だけでなく、先生側にもいえる。噂によると、ある教師がヒーローの素質がないと判断し、一クラス全員退学にしたことがあるとか。
そんな自由な学校なら、枠が１つ増えたとしても不思議じゃないかも。
今クラスには１９人の生徒が登校しているため、あと２人来るということだろう

「あ、１人来た。あの緑髪の男子！」
「おお、それじゃあと一人か！どんな奴か楽しみだな！」
「そうね。実際、今教室にいる人たちもなかなか濃いわ」

雄英高校ヒーロー科はとてつもない人気を誇り、毎年倍率は３００を超える。
つまりその厳しい試験を乗り越えてここにいる者は、全員が雄英に相応しい実力を持つのだ。今ここにいない２１人目もなかなかの曲者に違いない。
「あら？先生が来ちゃったわね？」

「あー、ホントだ」
「あれ？21人目は来ねぇのかな？」

【報告・授業開始時刻が5分過ぎている。早急に撮影を止め、目的地に移動することを推奨】
「、、、あれ？」

件の21人目は桜の撮影に夢中で、学校のことをど忘れしていた。

0．4

彼女、ヨルハ2号B型は全力で走った。入学早々遅刻なんて、学校に行ったことのない彼女でもそのヤバさがわかったからだ。既に手遅れであるが。

部隊にいた頃の2B（トゥービー）は真面目だった。任務を確実に遂行し、命令に違反したことなど最後の最後を除いて一度もなかった。

そんな優秀な彼女を知っている者が、今の彼女を見たらきっとこう思うだろう。なんでこんなにポンコツ化しているんだと。

実際2B自身も自分の変化に戸惑っていた。何かに夢中になって他の優先すべきことを忘れるなんて、あの頃の自分は想像していないだろう。まるで人並みの少年少女がしでかした失敗だ。

だが戦うために生まれた2Bにとって、人並みのことをするのは良いことだと彼女自身も感じる。

、、、いや、やっぱり遅刻はヤバい！

これは入学式には間に合わないかもしれない。いざとなったらポッドのハッキングで停電させ、暗闇に乗じてさりげなく式に参加するか。

いや流石にオールマイトに迷惑を掛けることは、、いやでも、、、。

「ん？」

思考しながら走っていたら、雄英高校の校門にたどり着いた。その運動場に誰かいるようだ。

あれは私が所属する1—A担任の相澤先生だ。先週、雄英の先生方

に挨拶したからわかる。
ということは、その後ろにいるのが私のクラスメイトたちか。なぜ式に出ずにグラウンドに集合しているのだろう。
いや、これは好都合だ。まだ間に合うかもしれない！

１―Ａの担任である抹消系ヒーロー：イレイザーヘッド：こと相澤消太は、グラウンドで１―Ａの生徒たちに雄英ヒーロー科の過酷さを演説していた。

「それから、この個性把握テストでトータル成績最下位の者は見込みなしと判断し、除籍処分としよう」
「「「はあああ!?」」」

今からやるのは：個性把握テスト：。ソフトボール投げ、立ち幅跳び、５０ｍ走、持久走、握力、反復横跳び、上体起こし、長座体前屈の８つの競技を個性を使用した状態で挑戦し、自分の限界値を図るというものだ。
１―Ａの生徒は２Ｂを含めて２１人。つまりこの中で成績最下位の者は今日、この学び舎を去るのだ。生徒たちに緊張が走る。
これがトップヒーローを数多く排出してきた名門：雄英高校：。その厳しさは一線を超える。

「生徒の如何（いかん）は先生の：自由：。ようこそ、これが雄英高校「すみませ

ん！遅刻しました!!」ヒーロー科、、、」

空気が凍った気配がした。こんな恐ろしい先生の授業に遅刻者がいるという。しかもついさっき見込みなしは除籍にすると断言されたばっかりだ。

生徒たちの考えは一つになった。最初に除籍されるのはこの乱入者だと。

２Ｂはその速度のままグラウンドに入った。何やら雰囲気がよろしくない。なにかあったのだろうか。

いや、まずは謝らなければ。

「すみません！遅刻しました!!」

声を掛けた瞬間、彼らの間に更なる緊張が走った気がする。

「Ｔａｙｌｏｒ（テイラー）・Ｂａｉｌｅｙ（ベイリー）・Ｅｖａｎｓ（エヴァンス）。入学初日に遅刻とはいい度胸だな？」

「すげっ！外人だ、、！髪白っ、、！」

「キレー、、、！」

「口黒子がセクシー、、流石雄英だぜっ、、！」

テイラー・ベイリー・エヴァンスとは、２Ｂの戸籍名だ。気に入っ

た映画の女優と俳優の名前を組み合わせて決めた。
２Ｂにとって自身の名前はヨルハ２号Ｂ型：２Ｂ：だ。だからファーストネームとミドルネームの頭文字をとってＴＢ、つまり２Ｂ（トゥービー）という愛称を呼ばせたいので、この名前は気に入っている。
その白い髪と薄緑の瞳、まるで人形のような顔にセクシーな口黒子、まるで映画から出てきたような美しい少女に、生徒たちは静かにざわめく。
しかし、担任の相澤先生だけは彼女を氷のような視線で睨みつけ、質問する。

「なにか言い訳はあるか？」
「言い訳のしようがありません。罰は受けます」

冷や汗をかきながら２Ｂは答える。怖い、明らかに怒っている。

「、、、今から個性把握テストを行う。成績最下位の者は除籍だ。早く体操着に着替えてこい」
「Ｙｅｓ，ｓｉｒ！」

Ｔａｙｌｏｒ（テイラー）・Ｂａｉｌｅｙ（ベイリー）・Ｅｖａｎｓ（エヴァンス）

記録

第１種目：５０ｍ走
３．５６秒

第２種目：握力
３００ｋｇｗ

第３種目：立ち幅跳び
６５１ｃｍ

第４種目：反復横跳び
１４３回

第５種目：ソフトボール投げ
１０８３ｍ

第６種目：上体起こし
１２７回

第７種目：長座体前屈
６１ｃｍ

第８種目：持久走
２分２７．１秒

トータル成績：１位

「バケモノ記録じゃねぇか、、、」
「すげぇ、、！」
「身体増強の個性かな？なんにしてもプロで通じそう」
「セクシー、、雄英最高かよ、、！」
「圧倒的だな」
「クソがっ！４位かよ!!」

クラスメイトたちがその圧倒的な成績に呟く。
２Ｂは加減をせず、全ての競技に全力を尽くした。風のように走り、弾丸のように投げ、嵐のように動いた。
２Ｂは入学早々除籍処分にされる確率が高いのは、遅刻した自分だと実感していたからだ。
２Ｂは決意した。もう、遅刻しない、絶対。

「ちなみに除籍はウソな」
「「!?」」
「君らの最大限を引き出す、合理的虚偽」
「「はーーーーーー!!!!?」」

結局除籍はなく、最下位の成績だった緑色の髪をした少年は気疲れした様子だった。
２Ｂはその少年に注目していた。彼の名前は緑谷出久（みどりやいずく）、その個性は自身の肉体を破壊するほどの超パワーだ。
先程の個性把握テストでもソフトボール投げに個性を使い、彼の右人差し指はぐしゃぐしゃになっていた。
２Ｂが緑谷に注目していた理由、それは彼のパワーがオールマイトに匹敵するほどのものだと感じたからだ。今はまだ弱いが、その個性を使いこなしたらと考えると将来有望である。

「ねーねー！私葉隠透（はがくれとおる）ー！エヴァンスさん一緒に帰ろ？」
「私、蛙吹梅雨（あすいつゆ）って言うの。梅雨ちゃんって呼んで。さっきは凄かったわね」

時は過ぎて下校時刻、２人の女子生徒に下校を誘われた。まさか漫画で読んだことが本当に起こるとは、、。
正直、少し嬉しい。

「私はテイラー・Ｂ・エヴァンス。２Ｂ（トゥービー）って呼んでくれると嬉しい」
「トゥービー？」
「テイラーのＴとベイリーのＢを合わせた愛称なんだ。普通はＴＢだけど、私は２Ｂって呼ばれてる」
「へー、そうなんだ。よろしくね、２Ｂちゃん！」
「よろしくお願いするわ、２Ｂちゃん」
「こちらこそよろしく、透に梅雨」

下校中、私と透と梅雨は色々なことを話した。その結果わかったことは、私たちは友人になったことと、、、

「えーー！２Ｂちゃん、となりの○物くん読んでるの?!」
「知人がおすすめしてくれたんだ。あれはとても面白い」
「なんだか意外ね。だけど私も少女漫画好きだから嬉しいわ！」
「私も嬉しい。２人のおすすめの漫画を教えてくれるともっと嬉しい」
「私のオススメはの○めカンタービレ！凄く昔にドラマとか映画化されてる名作だよー」
「私のおすすめは○に届けっていう漫画よ。風早くんと爽子ちゃんのカップルは読んでる間中、ずっとどきどきしちゃうの！」

「なるほど、どちらも面白そう」
「私、〇に届けは全巻持ってるの。良かったら貸しましょうか？」
「！是非とも貸してもらいたい」
「あー、私も読みたい！後で私にも貸してー？」
「もちろんいいわよ」

女子にとって少女漫画は共有の文化だってことだ。

「梅雨ちゃん、２Ｂちゃん、連絡先交換しよう？」
「もちろんいいわ、透ちゃん」
「私も大丈夫。ポッド」
【了解：当機の連絡先を蛙吹梅雨、葉隠透の２名と交換する】
「うわっ！なにこれ？」
「これはロボット、、なのかしら？」
「紹介する。これはポッド０４２。私のスマホ」
【、、、】

ちなみにポッドのことは本当にスマホとしても紹介した。
それに不満をもったポッド０４２だったが、葉隠と蛙吹に撫でられ、絆されてしまうのであった。２Ｂは心の中で計算通りとほくそ笑んだ。

翌日、今度は遅刻をせずにしっかり登校していた２Ｂは授業を受けていた。
雄英高校ヒーロー科は午前に必修科目・英語等の普通の授業を受け、午後からヒーロー基礎学をやるのが基本的な時間割だ。お昼はクックヒーロー：ランチラッシュ：による一流料理を安価で頂けるということで、２Ｂはお昼をとても楽しみにしていた。
ちなみに２Ｂは戦闘用アンドロイドとして知能を最高準の設計されているため、予習と復習をしっかりしていれば授業に遅れは取らない。
超難関校らしい難しさを感じさせる授業が終わり、正午を告げる鐘が鳴る。２Ｂは葉隠と蛙吹を連れて、楽しみにしていた雄英の大食堂に来ていた。

「美味い、、、」
「２Ｂちゃんって、本当に美味しそうに食べるよね」
「そうね。微笑ましいわ」

２Ｂはカツカレーを食べていた。
サクサクの衣を纏ったカツは、口に入れるだけで簡単に噛みちぎれるほど柔らかい。
カレーは複数のスパイスを使ってるのか、病みつきになる辛さと甘さを感じさせる。またその食欲を刺激する匂いと味に、スプーンが止まらない。
そんな美味しいと美味しいを合わせた禁断の料理カツカレーに、２Ｂは夢中で食べていた。

「私雄英に来てよかった」
「、、私のパスタ少し食べる？」
「ぜひ」
「私のサンドイッチも少しあげるわ」
「ぜひ」

楽園（エデン）はここかもしれない。

「わーたーしーがー!!普通にドアから来た!!!」

「オールマイトだ、、、！すげぇ、本当に先生やってんだな、、、!!!」
「あれ銀時代（シルバーエイジ）のコスチュームじゃない、、、?!」
「やばっ、、！鳥肌立ってきた、、、！」

午後のヒーロー基礎学はオールマイトが担当を務めるようだ。そのトップヒーローの風格に生徒たちは興奮を抑えられない。
当然だ。あのＮｏ．１ヒーローに見てもらえるのだから、興奮しないわけない。２Ｂも少なからず高揚していた。

「ヒーロー基礎学！ヒーローの素地をつくる為、様々な訓練を行う科目だ!!早速だが今日は戦闘訓練をするぜ!!!」

オールマイトが手元のスイッチを押すと、各生徒の「個性届け」と「要望」に沿って作られた戦闘服（コスチューム）が壁から出てきた。
学校専属のサポート会社が便利で最新鋭のコスチュームを作ってくれ、その性能は折り紙付きだ。
自分の理想の姿となる戦闘服（コスチューム）に生徒たちは更に興奮を高める。
これを着ることによって自覚する、今日から自分たちはヒーローに

なるのだと。この服を着て人を助けるのだと。
「着替えたら順次グラウンド・βに集まるんだ!!」
「「はーい!!!」」

場所は移り、雄英が所有する運動場の一つであるグラウンド・β。市街地を模して作られており、ビルや家が並び立つ。最高峰の雄英だからこそ建てられるすごい設備だ。
生徒たちはそれぞれの戦闘服(コスチューム)を身にまとい、これから始まる訓練に向けて期待を高める。それぞれ個性を使いやすいように要望を出したが、なかなかカッコいい服にデザインされていた。
２Ｂはいつものように黒いゴシック風のワンピースにタイツ、手袋、ヒール靴に布のような戦闘用ゴーグルを身に付けていた。これは一見動きにくそうだが、アンドロイドたちの為に作られたものであるために実は動きやすいのだ。
スリットの入ったスカートが風ではためく。今日は風が気持ちいいな。
４月の涼しい風を感じていると、クラスメイトの芦戸三奈(あしどみな)が喋りかける。

「わぁ!エヴァンスそのコスチューム可愛い!」
「ありがとう。親しい人は２Ｂと呼ぶからそう呼んで欲しい。芦戸のコスチュームも素敵だ」
「あたしも三奈でいいよ。ていうかヒール靴?!動きやすいにくくない?」
「慣れれば意外と悪くないよ」

そこに葉隠透と蛙吹梅雨も合流し、先生が来るまで談笑する。
「わー!梅雨ちゃんそのぱつぱつコスチュームセクシーで可愛いー!」

「ありがと。透ちゃんは手袋と靴だけ？」
「うん。個性を生かす為に服は邪魔なだけだし」

葉隠透の個性は：透明：。常時発動型でその姿は誰にも見えないが、その元気な声と身振り手振りは活発さを感じさせる。
そのコスチュームは透明人間の力を全力で発揮するものだが、女子高生としての倫理観的にどうなのだろうか。あと４月とはいえ、何も着なくて寒くないのだろうか。

「さぁ、始めようか有精卵共!!!戦闘訓練のお時間だ!!!」

オールマイトが来たため会話を止め、その説明を聴き、これから始まる訓練の為に心を引き締める。
いよいよ：戦闘：が始まる、、！

0・5

戦闘訓練、その内容は屋内での対人戦闘だ。敵(ヴィラン)退治は主に屋外で見られるが、統計で言えば屋内のほうが凶悪敵(ヴィラン)出現率は高い。
麻薬・銃火器・裏商売、真の賢しい敵(ヴィラン)は闇に潜む。
今回の訓練は実際にそれらを想定し、敵(ヴィラン)組とヒーロー組に分かれて2対2の屋内戦だ。
状況設定は敵(ヴィラン)がアジトで核兵器を隠し、それをヒーローが処理しようとしているというものだ。
ヒーロー側は制限時間内に敵(ヴィラン)を特定のテープで捕まえるか核兵器を回収する事が、敵(ヴィラン)側は制限時間まで核兵器を守るかヒーローを捕まえる事が勝利条件だ。
ポッドと観た映画に似たような設定があったような、、、。

「コンビニ及び対戦相手はくじだ！」
「適当なのですか!?それに1人余ります！」
「プロは他事務所のヒーローと急にチームアップする事が多いし、何より君たちが複数の敵(ヴィラン)に囲まれた時に味方がいるとは限らない！そういう時の対処も見たいのさ!!」
「そうか、、、！先を見据えた計らい、、失礼致しました！」
「いいよ!!早くやろ!!」

オールマイトに積極的に質問していたのは飯田天哉(いいだてんや)。真面目でメガネを掛けていて委員長タイプだが、その体格はA組の中でもがっしりしている方だ。

彼の個性は：エンジン：で、走るスピードは２Ｂよりも速い。スピードを代名詞にしてるわけではないが、２Ｂはちょっぴり悔しい気持ちを味わった。
２Ｂが引いたくじはＩ、尾白猿尾（おじろましらお）と葉隠透との３人ペアだ。

「よろしくねー。尾白くん、２Ｂちゃん！」
「よ、よろしく」
「よろしく。尾白、透」

尾白は葉隠の格好に少し照れ臭そうにしていた。なぜなら透は手袋とブーツしか身に付けてないから。むっつりめ。

１戦目はＡチーム対Ｄチームだ。ヒーロー側のＡチームメンバーは緑谷出久と麗日お茶子（うららかおちゃこ）、敵（ヴィラン）側のＤチームメンバーは飯田天哉と爆豪勝己（ばくごうかつき）だ。
麗日の個性は無重力（ゼログラビティ）、掌の肉球で触れた物の重力を減らせる。
その容姿は丸い頬っぺをした可愛い顔をしているが、ヒーロー志望らしくその体格は引き締まっている。現在緑谷と話しているがその表情は優しく、見ていて癒される印象だ
逆に敵（ヴィラン）側のチームである爆豪勝己の印象は、刺刺しい。目付きは鋭く、その表情はヒーロー志望より敵（ヴィラン）志望と言われた方が納得できるほどの凶悪顔だ。
そんな彼の個性も荒々しい：爆破：。掌からニトログリセリンのような汗を分泌し、爆発させることができる。
その使用法は単純な爆破による攻撃に爆破を利用した加速など、便利でシンプル故に強い。
爆豪は緑谷を憎悪に満ちた顔で睨みつけている。仲が悪いのかもしれない。

「敵（ヴィラン）チームは先にセッティングを！５分後にヒーローチームが潜入でスタートだ。他の皆はモニターで観察するぞ！」
「「はい!!」」

屋内対人戦闘訓練が開始した。
オールマイトとＡ組の生徒は同ビルの地下のモニタールームに移動していた。オールマイトはペンと教簿を手に持ち、戦闘が始まろうとしている４人を観察している。

「緑谷たちは窓から侵入するみたいだな」
「ねーねー！皆だったらどう攻める？」
「俺だったらまず電気系統を破壊するかなー。俺の個性電気系統だし」
「あほ！この後ウチらも戦うんだから話しちゃダメでしょ！」
「あ、やばっ！」
「もう遅いですわ」

クラスメイトたちが話し合ってる中、試合は動き始めた。
侵入した緑谷と麗日がひっそりと移動中に、通路から爆豪が飛び出した。右手を爆破させて緑谷に奇襲を仕掛けるが、覆面を半分焼いただけで避けられる。

「いきなり奇襲!!」
「爆豪ズッケぇ!!奇襲なんて男らしくねえ!!」
「緑くん、よく避けたな！」
「奇襲も戦略！彼らは今実戦の最中なんだぜ！」

爆豪と緑谷の最初の接戦に峰田実（みねたみのる）、切島鋭児郎、芦戸三奈が反応し、オールマイトが解説する。
爆豪は攻撃の手を緩めずに右手を緑谷にふるが、緑谷はそれを読んで右腕をつかみ、そのまま地面に叩きつけた！
緑谷は改めて構え直し、そして爆豪になにか語りかけた。その言葉に爆豪は激昂している。
爆豪の表情は怒りで満ちており、空に向かって喋っている様子だ。
その様子に疑問を覚えた切島が口に出す。

「アイツ何話してんだ？定点カメラで音声ないとわかんねぇな」
「小型無線でコンビと話してるのさ！持ち物はプラス建物の見取り図と確保テープ！コレを相手に巻き付けた時点で《捕らえた》証明となる!!」
「制限時間は15分間で、核の場所は《ヒーロー》には知らされないんですよね？」
「ＹＥＳ！」
「ヒーロー側が圧倒的不利ですねコレ」
「相澤くんにも言われたろ？アレだよ。せーの！」
「「Ｐｌｕｓ（プルス） ｕｌｔｒａ（ウルトラ）!!」」
「あ、ムッシュ爆豪が！」

爆豪は爆破で加速して緑谷に蹴りを繰り出すが、それと同時に麗日が走りだす。おそらく爆豪の相手は緑谷に任して核を探すのだろう。
緑谷は蹴りを防御し、脚に確保用テープを巻こうとした。だが爆豪はテープから逃れようとせず、完全にテープを巻かれる前に右腕の大振りで緑谷に攻撃を仕掛けた。

緑谷はまたしても爆豪の行動を予測し、前方に転がって攻撃を回避してその場から逃げ出す。
逃げられた爆豪は両手を爆破させ、イラついた顔で何か叫んでいた。

「緑谷ちゃん、凄いわね」
「うん。身体能力はそこまでなのに、爆豪と張り合ってる。多分緑谷は反応してるんじゃなくて予測してるんだと思う」
「予測？」
「そう。あの二人は知り合いみたいだから癖や行動を知っているのもあるけど、緑谷はそれを分析して戦闘に生かしてるんだ。」
「なるほど、、。それで爆豪ちゃんと対等に戦えてるのね」
「いや、表情からみて爆豪は感情に振り回されている。もっと冷静だったら、たぶん緑谷は負けてる」

２人の戦闘を蛙吹と２Ｂは分析する。この戦闘の行方は解らないが、敵（ヴィラン）としてもヒーローとしても爆豪は失格だ。
戦闘中の兵士は感情に振り回されてはいけない。冷静に状況を把握し、判断しなければ殺されるのは自分だ。

「あ、麗日が核見つけた」

緑谷と別行動をしていた麗日が核兵器のレプリカを見つけ出した。柱の陰に隠れ、核の前にいる飯田の様子を伺っている。
飯田は何か考え込んでいる様子だが、、あ、飯田を見ていた麗日が、何故か笑って吹き出した。
当然飯田は麗日の存在に気づく。

可愛いけど、戦闘中にそれはダメだ。飯田が本当の敵(ヴィラン)なら、麗日は殺されていてもおかしくない。可愛いけど。
ん？爆豪が腕につけている手榴弾のような篭手でなにかしようと、、、

「爆豪少年、ストップだ！殺す気か?!」

大きな爆発波が発射された。ビルに大穴が空き、私たちのいる地下まで振動が伝わってくる。
なんて破壊力だ。死人が出てもおかしくない。緑谷は無事だろうか。
いた。大穴のすぐ横で地面に尻をついて、爆発の威力に恐怖で顔を歪めている。
あれは当てようと思えば当たっていたな。威嚇目的で撃ったのか解らないが、やってる事は滅茶苦茶だ。

「爆豪少年。次それ撃ったら、、、強制終了で君らの負けとする。屋内戦において大規模な攻撃は守るべき牙城の損壊を招く！ヒーローとしてはもちろん、敵(ヴィラン)としても愚策だ、それは！大幅減点だからな！」

緑谷は怯えた表情を浮かべていたが、すぐに切り替えて無線で麗日に連絡をとる。だが爆豪はオールマイトの指示を聴くと、すぐさま接近戦を仕掛けた。
正面から加速する爆豪。緑谷はまた爆豪を予測して反撃をしようとするが、爆豪は緑谷の前で爆破して軌道を変え、緑谷の背中を爆破した。
怯んだ緑谷を右腕の重い篭手で殴り、そのまま右腕を掴んで爆破の

勢いのまま地面に叩きつけた。
強い。爆破威力を微調整して相手を撹乱し、確実に攻撃を与えた。戦闘センスが高く、伸び代もある。実力は一年生の中ではトップクラスに近いだろう。
緑谷は咳き込みながらも窓際に追い込まれる。緑谷の状態的に、次が最後になるかもしれない。
緑谷の勝機はあの超パワーの個性だ。しかし緑谷自身がパワーを使いこなせていないので、下手をすれば爆豪の命を奪ってしまうだろう。
圧倒的不利な状況。だが緑谷のその表情は果敢に満ちていて、逆に爆豪は何処か余裕のない表情をしていた。
緑谷が叫び、２人が同時に動き出す。
緑谷と爆豪はそれぞれ右腕を振るった。爆豪は緑谷の顔に、緑谷は上に向けて。
凄まじい衝撃波が放たれ、飯田と麗日のいる部屋まで貫く。
麗日は壊れた柱を無重力でバット代わりにし、緑谷の衝撃で壊れたビルの破片群を飯田に打つ！
その数多の礫に飯田は防御の姿勢を取るが、その隙に麗日が自身を無重力にして核兵器に近づいた。
今ここにＡチームの勝利が決まった。
緑谷は爆豪の攻撃を予測して防御していたが、数多の負傷と個性による反動で倒れる。
麗日も自身を無重力にした反動で吐いていた。

「すごい試合だったな」
「負けた方がほぼ無傷で、勝った方が倒れてら、、、」
「勝負に負けて試合に勝ったというところか」
「訓練だけどね」

Ａ組の生徒たちが感想を言い合う中、２Ｂは喋らずにじっとモニターを見ていた。目元が見えないので無表情にみえるが、どこか怒っているようで少し怖い。

「２Ｂどうしたの？」
「、、、いや」

その様子に芦戸が思わず聞くが、お茶を濁される。
次の対戦はヒーローのＢチーム対敵（ヴィラン）のＩチーム。
２Ｂたちの番だ。

２Ｂ・葉隠・尾白はビル内で待機しながら作戦を練っていた。
対戦相手は轟焦凍（とどろきしょうと）と障子目蔵（しょうじめぞう）。２人の個性はわからないが障子は腕が６本あり、河童のような膜が３つの腕の間に繋がっている異形型ということがわかる。

「さて、どうしようか」
「やっぱりこういう時って、相手の個性で対策立てたいよねぇ」
「轟は戦闘服（コスチューム）の半分が氷だし、多分氷系統かな」
「障子は喋るときに腕が口に変形していた。異形型だけど、感覚が鋭いタイプかもしれない」
「あ、それじゃあ私たちの位置が知られちゃうかもってこと？」
「それだけじゃない。訓練が開始した瞬間、轟がビルを丸ごと凍らしてこちらを行動不能にさせると思う」
「？なんでわかるんだ？」
「轟は強い。顔を見てわかったけど戦いに緊張していないし、常に冷静な表情だった。冷静な兵士は判断が速い。私が轟だったら、出し惜

しみせずにすぐビルを凍らせる」
「そんな憶測だけで、、」
「憶測だけど、これは実戦だ。実戦にはアクシデントが付きまとう。もしもに備えた方がいい」
「なるほど、、それじゃあどうする?あとさっきから気になってたけど、後ろで浮いてるの何、、？」
「尾白くん。この子はねぇ、ポッド０４２っていう２Ｂちゃんのスマホだよー」
「スマホ?!これが?!!、」
「昨日自己紹介したもんねー」
【当機はポッド０４２。２Ｂをサポートするために作られた随行支援ユニットだ。決してスマートフォンではない】
「私の個性の関係でサポートしてくれる便利なスマホだ」
「そういえば２Ｂの個性って？」
「サイコキネシスのようなもの。エネルギーを貯めて使うんだけど、普段はエネルギーが強すぎるからポッドに供給することでバランスを保っているの」
「なるほど、強個性だな」
「尾白の個性は、その大きい尻尾？」
「ああ。動かすことしか出来ないけど、その分近接戦闘を鍛えた」
「なるほど。尾白くん、努力家なんだね」
「いやそんな、、」
「むっつりか」
「いやなんで?!」

　互いに個性の情報を伝えながら作戦を考える。この会話で尾白のことがよくわかった。絶対むっつりだ。

「作戦を思いついた」

「なに？２Ｂちゃん」
「あの二人に接触次第、ポッドで焼き払う」
「物騒なのやめよ??!」
《伝え忘れたけど、エヴァンス少女はポッド使うの禁止な！危なすぎる》
「そんな?!」
「いや、よかったよ、、」

訓練を開始する前から尾白は疲れていた。彼は苦労人体質のようだ。

「わかった。次は真面目な作戦」
「なになに～？」
「本当に頼むぞ、、」
「あ、その前に、、。ポッド、非殺傷モードに設定」
【了解：設定完了】

５分後、訓練が開始した。即座に障子は腕を耳に変化させ、３人の居場所を探る。

「、、歩く音を感じない。多分歩かずに立ち止まってるな。」
「感知されることを向こうは予測してたってことか？」
「そうだな。だけど微かな息の音や服が擦れる音を感知できた。敵は

四階北側の広間に一人、一階のどこかに二人だな。全員服を着てるが、透明の奴は多分一階にいるどっちかだな」
「外出てろ。危ねぇから」

轟はビルの壁に手を当て、ビルを凍らせる。

「向こうは防衛戦のつもりだろうが、俺には関係ない」

２Ｂの予想通り、轟はビル全体を凍らせた。その繊細な技は対象の核兵器も敵（ヴィラン）の足も凍らせ、核の確保し敵を無力化させる、はずだった。
悠々と歩いていた轟の背後から２Ｂが恐ろしく速さで接近し、後頭部に蹴りを放った。轟は咄嗟にしゃがみ、彼女の蹴りを避ける。

「、、驚いた。完全に不意を付いたと思ったのに」
「こっちのセリフだ、、！無力化したと思ったのに、お前なんで動ける」
「ビルが凍る瞬間にジャンプして足の凍結を防いだだけ。氷系統の個性だと服を見てわかったし、予想はつく」
「だからって回避できるか、、よ！」

轟は全力の凍結を放つ。その氷の量は、ビルの狭い通路など簡単に埋まった。
２Ｂは打刀：白の契約：を生成し、氷をバラバラに切る。
こいつ、強い!!個性把握テストの成績も凄かったが、普通刀で全部切れるか?!
氷を切りながら接近する２Ｂに距離を取ろうとするが、四〇式戦術槍を取り出し、そのまま轟に投げた！
氷の壁を作り、飛んでくる槍を防御。氷に突き刺さった槍を手に

取った２Ｂは、そのまま力任せに振り下ろして氷を砕きながら轟に更に近づいた。
ここで轟は、逆に２Ｂの懐に接近する。槍のような長物が真価を発揮するのは、相手と間合いを保っている時だ。しかしその間合いに侵入されたら、弱い。
直接触れて凍らせる、、！
だが２Ｂは槍を背中で回し、接近した轟にその回転の勢いをぶつける。左腕で防御し、刃でなく槍の柄の腹が当たったので軽症で済んだが２Ｂの猛攻は止まらない。
槍を地面に突き刺し、それを起点に回転して轟の顔に蹴りを入れる。轟は怯みながら凍結を放つが、２Ｂは槍を蹴りあげながら端を持ち、その刃を右斜め上から轟の肩に振り下ろした。
その刃は潰れているらしく、肩にのめり込みながら轟を地面に叩きつけ、その意識を数秒奪う。

轟が目を覚ますと、その体はテープで巻かれていた。完全な敗北だった。

「こちら２Ｂ。対象を確保」
「こちら葉隠！こっちも無事障子くんを確保しました！」
「おっけい。２人ともおつかれ！」
「お疲れ様ー！」
「おつかれ」

どうやら障子も捕まったらしい。２Ｂと一緒の階にいたから、避けれても不思議じゃない。
Ｂチーム対Ｉチーム、勝利したのはＩチーム。
その戦闘は５分にも満たない、迅速なものだった。

「クソっ、、！強すぎるだろ、、、！」
「いや、あなたの服装や言動で個性や強さを予測出来たからこそ勝てた。私の能力も極力見せなかったし、今回のあなたの敗因は情報と経験の不足だ」
「いや、接近戦に持ち込まれる時点で勝つのは無理だ、、。お前、何やったらそんなに強くなるんだ？」

「、、、戦争かな」